

# 「Tプロデューサー」が語る コンテンツ業界・日本企業の課題と解決のゆくえ



Interview

Gontents合同会社 代表

つちや

としお

## 土屋 敏男 さん

プロフィール：1956年、静岡県生まれ。1979年、一橋大学社会学部卒業後、日本テレビ放送網（現日本テレビホールディングス）入社。「電波少年シリーズ」、「ウッチャンナンチャンのウリナリ!!」などのバラエティ番組制作に携わり、「Tプロデューサー」として知られる。その後、編成部長、コンテンツ事業推進部長、PR局次長、日テレラボ シニアクリエイターなどの他、日本テレビと日テレアクセスオンが設立した新会社「LIFE VIDEO」代表取締役社長等を歴任。2022年9月末に同社を満期退社し、10月に「Gontents合同会社」を設立。引き続き日本テレビの社外アドバイザーを務める他、WOWOWや愛知県豊田市のケーブルテレビ「ひまわりネットワーク」のアドバイザー、「みんなのテレビの記憶合同会社」代表など多岐にわたり活動している。

【取材・文】 勝田 慶 中小企業診断士

【写真提供】 安岡 嘉

### — The prologue

インターネットやスマートフォンの普及、ライフスタイルの変化により、「テレビ離れ」が叫ばれて久しい。一方で、Netflix等の動画配信プラットフォームでは、さまざまな国のコンテンツが世界に向けて発信され、爆発的な人気を得ているものもある。今やテレビ・コンテンツ業界に限らず、世界にイノベーションを起こすモノやサービスを提供している日本企業を探すのが難しくなっている。

「電波少年」、「ウリナリ!!」など、テレビの世界で常に「今ないもの」、「誰も見たことがないもの」を作り続けてきた土屋敏男氏の取り組みから、今後のコンテンツ業界、そして日本企業のあるべき姿、進むべき方向性についてヒントを得たい。



めて細かい情報といった、「隣の人が見たら面白くないけれど、市民にとってはとても面白い」というような番組を作りたいと思っています。

また、既存のコンテンツの新たな楽しみ方として、たとえば、「M-1グランプリ」に挑戦している豊田市出身の人を追いかける企画なども考えています。今までは、テレビで放映される決勝戦しか注目していなかったところを、1回戦や2回戦までしか進めない無名のコンビも、地元出身ということで応援できて楽しめるようになるのでは、と考えています。

### —このような事業を考えたきっかけは？

これからの時代においてコンテンツに求められるのは、「濃さ」だと感じたからです。十数年前まではコンテンツの選択肢はテレビや映画などに限られていましたし、社会に対する「窓」として何となくテレビをつけている人が多かった。そこから、インターネットの普及、特に動画配信プラットフォームの浸透によって選択肢が莫大に増え、その中から自分で選ぶようになりました。テレビはこれまで、子どもからお年寄りまで広く受け入れられるものを作ろうとしてきましたが、これからはもっとターゲットを狭くして、より「濃い」ものを提供していかなければ、選ばれなくなると

### ローカル化で「濃さ」を追求する

—昨秋、日本テレビを退職・独立されましたが、現在、最も力を入れている事業を教えてください。

愛知県豊田市にあるケーブルテレビ局「ひまわりネットワーク」とアドバイザー契約を結んで、豊田市出身者や豊田市民だけで作る、豊田市民のための番組制作を進めています。市内のお店の極